2004-2005 東京漢方入門講座

第9回（通算29回）『似顔絵の告白』

2005.6.16

世の中には似ているけれど違うもの、見た目はそっくりなのに反対の性質を持つもの、
そんなものがあります。

人は何かを認識する場合、「心像」というものに照らし合わせて判断を行うのだそうです。
心像とはmental imageの訳で、実像ではなく心の中のあらかじめ作り上げた像のことを言います。
つまり、我々が何かを認識するというのは、実像を直接認識しているのではなく、実像という情報を取り入れた後で心の中の心像と照らし合わせることで「これは何々」と認識をしているということです。だから、一度も見たことが無い物に対しては心像が用意されていないので、「これはいったい何？」ということになるわけです。また、心像に似ているものは本当は心像とは違う種類のものであっても誤って認識することもあるということです。　そんな認識の誤りが生薬においてなされていても不思議ではありませんね。

漢方薬を構成している生薬、これらには様々な加工が加えられることがあります。天日に干したり、湯通ししたり。このような作業のことを修治と言います。
修治の目的はこれもまたいろいろあります。毒性を消すためであったり作用を増強するためであったり．時には同じ生薬でも修治の仕方によって薬能が変わってしまうことすらあります。
我々が漢方処方の薬能を学ぶ際、配合されているひとつひとつの生薬の薬能の合算として全体の処方の方向性を考えることについては再三お話しております。しかし、同じ生薬名が記されていても前述の修治の方法が異なれば目的が違うものになる場合だってあるということになります。期待される薬能を実現するために修治の方法が選ばれるということです。

本日は様々な処方に配合される『地黄』について、その処方における配合目的の違いを考えてみます。どうぞ、それぞれの処方において地黄に期待される薬能についてお考えになられてみてください。修治の仕方によって薬能をかえる地黄、きっと「それならこっちの地黄が」とお気づきになられることと思います。

そして本日の番外編では「神社に植えられている樹木」についてお話をしてみます。
どこの神社にも樹木は必ず植えられていますが。それは景観のためだけに植えられているわけではありません。いったいどんな意味があってそれぞれが植えられているのかについてお話いたしましょう。そしてそこから大昔の人々にとっても気や心の問題がいかに重要であったかについて考えてみます。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。
さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

地　黄

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、そしてどのように使い分けるのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

炙甘草湯：炙甘草、人参、大棗、麦門冬、地黄、阿膠、麻子仁、桂枝、生姜

荊芥連翹湯：地黄、当帰、川芎、芍薬、黄連、黄芩、黄柏、山梔子
桔梗、枳実、防風、荊芥、連翹、柴胡、薄荷、白芷、甘草

竜胆瀉肝湯：地黄、当帰、木通、黄芩、山梔子、竜胆、車前子、沢瀉、甘草

六味丸：地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮

四物湯：地黄、当帰、川芎、芍薬

人参養栄湯：地黄、当帰、白朮、茯苓、人参、桂枝、遠志、芍薬、陳皮、黄耆
五味子、甘草

消風散：石膏、知母、荊芥、防風、苦参、牛蒡子、地黄、当帰、蒼朮
木通、胡麻、蝉退、甘草

ポイント

■修治と薬能

浅岡俊之
www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

本日は「修治」と生薬の薬能について取り上げます。

漢方処方に配合される生薬にはそれぞれ特有の性質があります。寒熱（すなわち冷やすのか暖めるのか）や燥湿（乾かすのか潤すのか）といった薬性に加え「〇〇という症状に使える」とか「△△という状態に使う」などといった薬能もあります。また、一つの生薬には一つの薬能しかないというわけではなく、複数の薬能を併せ持つ生薬も珍しくはありません。
そしてさらに、修治と呼ばれる「生薬の加工」によってその薬能や薬性に変化がもたらされることがあります。

地黄という生薬がありますが、この地黄も修治によって薬性・薬能を変える生薬のひとつです。
地黄には使い方が三通りあります。

ショウ　ジオウ 生地黄	新鮮根を搗き、地黄汁として用いることが多い。 薬性は寒で清熱効果が強い。 現在では生地黄というかたちでは殆ど用いられない。
カン　ジオウ 乾地黄	生地黄を乾燥したもの。薬性は寒で、清熱効果に加え滋潤を目的として用いられることが多い。
ジュク　ジオウ 熟地黄	酒などで蒸し、乾燥させたもの。 薬性は温で、補血作用が主たる目的。

同じ地黄でも、それぞれの用途目的によって使い分けられることは言うまでもありません。

このように生薬名は同じでも、実は修治の仕方によって使用の目的が異なる場合があります。
正確に処方の意図を理解するうえでは修治の仕方にも目を向ける必要があります。